東ユーラシアの経験―伝播のネットワークからみた大モンゴルの時代―

同志社大学　向正樹

０．導入

〇時代背景―大モンゴルの時代(13～14 世紀)―

・「ユーラシア史上，ただひとつ，ユーラシアの中央をおおうぼんやりとしたもやがすっかり吹きはらわれ，東西すべてをひとつの全体像として眺められる時代がある．それは西暦十三，十四世紀に，人類史上，最大の版図をつくりあげたモンゴルとその時代である．……ユーラシアの東西は，モンゴルの主権のもとにむすびつけられ，いやおうなくおなじ時代を生きざるをえなかった．……」 [杉山 1992]

〇BTN 分析（Bounding Transmit Network Analysis）

・BTN はひとつの連関がある「刷新」を可能とし，またそれが「翻訳」され伝播することで新たな連関が作り出されていくさまを追う

アクタント＝人・生物・モノ

伝播＝アクタントのあいだを技術・アイデア・イメージ etc.が伝わること

ネットワーク＝伝播を可能としたアクタントの間の結合

バウンド＝かなり離れた時代・地域に達しているような伝播の現象 [向 2020]

・本日の講義では，軍事技術と食にまつわる伝播の事例をクイズ形式で紹介する

ライフメーター（１問間違えるたびに右から１つずつ目盛りを黒く塗りつぶします）

Ⅰ．貿易陶磁史からの問い―遠距離交易によって運ばれたモノとは？

Q1　モンゴル帝国時代の中国の景徳鎮（けいとくちん）という焼き物の町で，あるタイプの磁器が大きく発展し，人気の国際商品となった．北方草原のモンゴル王侯の都の遺跡，エジプトのカイロ，トルコのイスタンブール，イランのアルダビール廟，ジャワのマジャパイト王国の都トロウラン，日本の博多，琉球（沖縄）などでそのタイプの焼き物が出土している．その上品で鮮やかな印象のデザインは，マイセンをはじめヨーロッパの磁器のデザインにも大きな影響を与えた．それはいったいどのようなデザインか？
答え：

Q2　ブルー・アンド・ホワイト（日本では染付，中国では青花）でミルクティーを飲むのは英国風の文化であると認識されている．しかしブルー・アンド・ホワイトはモンゴル時代の国際商品であり，モンゴル宮廷でも使用された．現在モンゴル国にはスーテーツァイというミルクティーがあるが，その歴史は比較的新しい．14 世紀のモンゴル宮廷にはミルクティーはなかったが遊牧民独特のお茶があった．それはどのようなものか？
答え：

〇大ハンのレシピ本―『飲膳正要』

・『飲膳正要』…元の宮廷料理人（飲膳大医）忽思慧が記した食に関する覚書を文宗皇帝トクテムル（1304-1332）に献上．目を通した皇后ブダシリが皇太子や皇后の財政を扱う中政院使・儲政院使バイジュ（拝住）に命じて刊行させた．高名な文人虞集（1272-

1348）が序文を書く.

〇西蕃茶，炒茶，酥簽

・酥簽…金字末茶（湖州産）を使う．湖州は唐の陸羽が『茶経』を書いた地．末茶＝抹茶

・酥油…「牛乳中取浮凝熬而為酥.」

・馬思哥油…炒茶に使う一種のバター．ポール・ブエル氏によると馬思哥油は mäskä Oil. 阿赤は qashiq. mäskä はトルコ語.『維漢詞典』（ウイグル語漢語辞典）によれば「〈方〉酥油，黄油」[Buell and Anderson 2010]

・ヤクバターの作り方

https://m.youtube.com/watch?v=oLl5FYeSrRY&feature=youtu.be

〇白磁と青花

・中国の歴史学者，史衛民によれば，「元代に青白茶盞が増える」
→青白瓷（影青）は白瓷に分類される.

・元青花の登場【図　元青花托盞】[朱 2010]

〇BTN

＜広がり＞

・英国デイヴィッド財団，トルコ・イスタンブルのトプカプ宮殿，イランのアルダビール廟，日本の大阪市立東洋陶磁美術館，東京国立博物館，出光美術館，松岡美術館にほぼ完品の景徳鎮産元青花のコレクション.

・元青花磁器の破片は中国やモンゴルの都市や窯の跡のみならず，エジプトのカイロのフスタート遺跡から大量に出土し，日本列島（沖縄を含む）・フィリピン・ブルネイ・インドネシア・インド・ペルシャ湾やアフリカ東海岸の古い都市や港町の遺跡でも出土.

＜バウンド＞

・14 世紀には，東南アジア大陸部でも輸出用の磁器生産開始．ベトナムでは元青花から影響を受けた青花が作製され，15 世紀には東は日本列島から，西はマムルーク朝，オスマン朝までと，かつて元青花が運ばれたルートをなぞるように輸出された.

・18 世紀初，ヨーロッパで磁器が開発される（中国人の発明から 1700 年あまりあと）：1709 年，東洋磁器コレクターのザクセン王国アウグストス強健王のもと，領内のシュニーベルク付近から採集されたカオリンを使って錬金術師ベットガーが硬質磁器焼成→翌年，マイセンを見下ろすアルブレヒッブルク城内に王立窯設立

・オーストリア帝国陪臣デュ・パキエがマイセンで働いていた陶工や陶画家をウィーンに招き，磁器焼成をスタート→マリア・テレジアに譲渡し王立ウィーン窯へ

・イタリア（1720 年）でマイセン，ウィーン窯の化学者コンラッド・フンガーを招きヴェネツィアにヴェッツィ窯開設．フランス（1768 年）でも真正磁器焼成

★宿題　元青花に関係する場所を地図に落として矢印でつないでみよう
※景徳鎮（中国江西省）を起点に

Ⅱ．食文化史からの問い―磁器を運んだ船が帰りに中国に運んだモノとは？

〇ふたつの「ういろう」

・「ういろう」といえば，米粉・麦粉に黒砂糖を加えた蒸し菓子がよく知られるが，透頂香（とうちんこう）という薬の別名でもある．ふたつの「ういろう」のルーツは，ユーラシア東方におけるモンゴル時代の海域交流にある．ここでは，室町時代の日本で生まれたふ

たつの「ういろう」に関わるアクターの連関を見てみたい.

Q３　米・小麦粉・砂糖を用いた和菓子「ういろう」は次のどれか？【写真】
１．　　２．　　３．

答え：

出所：伊勢志摩観光ナビ HP　https://www.iseshima-kanko.jp/feature/uiro
世田谷自然食品 HP　https://www.shizensyokuhin.jp/archives/articles/538
本家西尾八ッ橋 HP　https://www.8284.co.jp/products/index

〇「外郎」と外交・医食
・江南（長江以南）で明朝が成立した 1368 年に一世外郎の陳順祖（又の名を陳延祐，陳宗敬）が博多に来航．二世外郎の大年宗奇が足利義満の招きで京都に移る．一世・二世父子は朝鮮や中国との外交に活躍.
・一世陳外郎には「大医院」としての経歴あり．元の太医院は医事を掌り，御薬物（皇帝のための薬）を製奉し，各属医職を領した.
・至元 12 年（1275）～，太医院の長である提点が礼部の長である尚書を兼ねる．陳外郎が代々継承する「外郎」という肩書きは正式には「礼部員外郎」（正六品）．礼楽・祭祀などを司る，一見外交とは無縁の官職．元貞元年（1295）～，礼部が会同館の仕事を担当.
・中書省六部の尚書および部下の侍郎・郎中・員外郎が，征服前の雲南大理や南宋も含め外国へ出使する例は多い.
→外交に従事することと礼部員外郎という官職を帯びていたこととは矛盾しないどころか，礼部や吏部・兵部の官名をもつ使者を送ることは元の末期まで続いた制度であった.
〇阿仙薬と海域世界
・外郎が透頂香（とうちんこう）に使った芳香性薬剤は丁字，白檀，竜脳，沈香，木香，安息香，蘇合香油，麝香，白膠香，檳榔子，陳皮，橘皮，縮砂，阿仙薬 [杉山 1999：37].
・『飲膳正要』にみえる「渇忒」が阿仙薬を指すと思われる．そして，その渇忒が何から取られるかについては二つの説がある．つまり，インド原産のマメ科のアセンヤクノキ（senegalia catechu）または南インド・スリランカから東南アジアのマレー半島，スマトラ島，ボルネオ島などに自生するウンカリア・ガンビール（uncaria gambir）の木である．[忽思慧 1993：147].

Q4　アセンヤクノキやガンビールの木の枝葉の枝幹を煎じた汁を濃縮して乾燥エキスにしたものが「渇忒」．どちらも多量のタンニンを含み，収斂性があり，口内清涼剤に適している．この「渇忒」は緑茶の主成分の名前の由来となった．その緑茶の主成分とは何か？
答え：

・カツィク？×

・カテキュー〇
　アセンヤクノキは（阿仙薬の木）はペグ阿仙薬とも呼ばれる．学名のカテキューは様々な言語に入っており，このカテキューなる語が『飲膳正要』の「渴忒」（kʰat-tʰək）と音写されたとみて良い．
　外郎の透頂香の主成分である阿仙香は日本や朝鮮で 15 世紀初頭に知られていることが朝鮮の文献にインド，タイ，ベトナム，中国（明）などからの対朝鮮中継品として現れる [杉山 2000：195；福岡県 1962，第 1 巻下：488].
・キンマ，ビンロウとガンビール
　インド・東南アジア・オセアニアにキンマという噛む嗜好品がある．いわゆるベテル・チューイングである．
　キンマとともにガンビールが収斂性酸味として添用された [杉山 1999：44-46].
〇砂糖と蒸し菓子「ういろう」
・日本列島と砂糖…長くサトウキビはなかったため専ら輸入に頼っていた．
　→つまり，砂糖というアクターが「ういろう」の誕生に関わるためには，朝鮮や明・琉球との海域交流が不可欠だったのである．
〇製糖技術とスイーツ文化の伝播
　モンゴル時代の中国において，砂糖の精製技術の発達と砂糖を用いた飲食物の需要
・甘蔗洲
・砂哩唎…アラビア語のシャルバー（sharbāt）の音写で，砂糖を用いた清涼飲料であった．
・バビロン人

Q5　米粉・小麦粉・砂糖を用いた菓子といえば，中東の伝統的な菓子ハルワー．元代の日用類書『居家必用事類』庚集 20 巻「回回食品」の 7 番目に「哈耳尾」と記され，「乾麪（小麦粉）をじっくり炒め，ふるいにかけてさらに炒め，蜜を垂らし，水を少し加えてかき混ぜてでき，それをちょうど良い断片に切り分ける」と説明される．作り方は今も作られるハルワーそのものである．ではハルワーと「ういろう」の作り方の違いは何か？ 答え：

〇BTN
＜同時代のつながり＞
・陳友諒と元末の群雄，陳友諒とベトナム
＜後世への影響＞ しらべてみよう
・外郎売，蟷螂山（とうろうやま），本圀寺（ほんこくじ）と外郎と朝鮮通信使，水無月（みなづき），「ういろ」

宿題
・ふたつの「ういろう」―透頂香と蒸し菓子―誕生にかかわった主要アクターは誰（何）？

Ⅲ．グローバル史からの問い

戦争の機械 engine

Q6　モンゴル軍は，かつてのアッバース朝の都であったイラクのバグダードを包囲するが，西アジア特有の堅固な城壁に阻まれ苦戦した．そのときモンゴル帝国軍は，ある極めて強力な兵器を使うことで，この城壁を突破することに成功した．その兵器とは，いった

いどんなものだったのか？
答え：

〇マンジャニーク―「回回砲」―

・1258 年，第 4 代大ハンのモンケの命令により，フレグがアッバース朝の都バグダードを包囲した戦いにおいてマンジャニークが使用された．周辺の山々から採集した巨石を飛ばし城壁を貫通したことが決定打となった．

・1268 年から 73 年にかけて，第 5 代大ハンのクビライの命令により，モンゴル（元）軍が南中国の南宋の要塞，襄陽（じょうよう）・樊城（はんじょう）を包囲した際，ビシュバリク出身のウイグル人武将アリクカヤの要請を受け，フレグ家当主アバカに依頼し，技術者のアラー・ウッディーンとイスマーイールを派遣させ，彼らが組み立てたマンジャニークで樊城の城壁を破壊し，そこから襄陽を砲撃し陥落させた．

Q７　モンゴル軍がバグダードや襄陽・樊城で用いたマンジャニークまたは「回回砲」とは，原始的な「戦争の機械」にいったいどのような技術改良を加えたものだったでしょう？（１分で絵を描いて答えよ）
答え：

〇BTS

＜後世への影響＞

・ルネッサンス…マンジャニークは，回転運動を直線運動に変換する機関の発展の基礎に．

・「戦争の機械」は 15 世紀イタリアのルネサンス文人たちの想像力をかきたてる．

〇14 世紀の危機

・ウィリアム・H・マクニール　『疫病の世界史』

＜ペストの伝播径路＞

1347 年から 50 年まで 4 年間でヨーロッパ全人口の約 3 分の 1 が死んだと推計．

＜感染拡大の要因＞

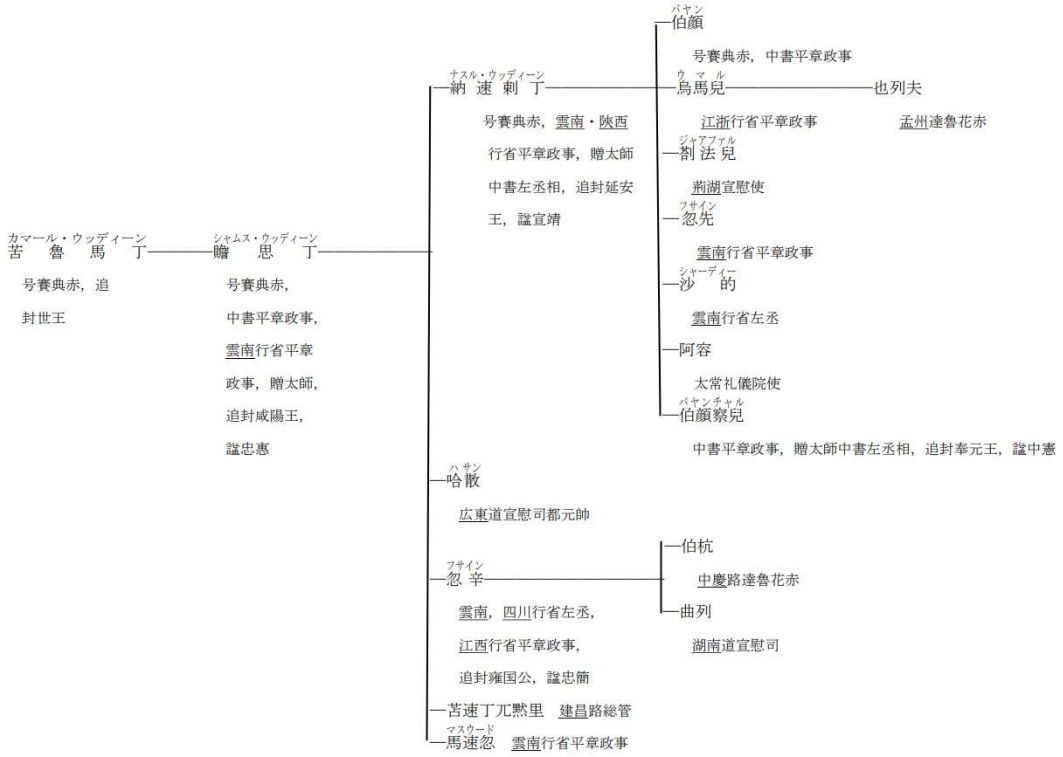
草原の齧歯類（げっしるい）の穴で安定したすみかを見出した．
船舶の航路網．北西ヨーロッパで，14 世紀に人口の飽和状態．
14 世紀から気候が次第に悪化，例年の局地的不作．
様々な状況が絡み合い，破滅的な黒死病の到来に．

＜ペストの社会的影響＞

考えてみよう

Q８　モンゴル帝国は疫病に対して何もしてこなかったわけではない。首都のような人口密集地帯で疫病と同時に起こる危機とは何があるか，それに対してどのように対処していたのか？

〇アミール・ウマル，1308 年の飢饉から大都（北京）を救う
〇サイイド・アジャッル―真正なる聖裔
・中国で最も有名なムスリム官僚，ブハラ出身のサイイド・アジャッル・シャムス・ウッディーン．サイイド・アジャッルとはペルシア語で「真正なる聖裔」，預言者ムハンマドの子孫を意味する．
【系図　モンゴル時代のサイイド・アジャッル家】



さいごに

・多くの場合、世界史は、世紀単位の時代のまとまりを時系列に従い配列する断代史のスタイルで書かれる
・実際には、さまざまな事物の連関や因果関係の連鎖は、ダイナミックに、時代や地域を越えて、縦横無尽につながっている
・未来が描きにくい「アジェンダの空白」にある今日、バウンドする創発的なネットワークについての知が求められているのではないか [向 2020]